

---

# とある大学生の悩み

うどん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある大学生の悩み

### 【Nコード】

N3276P

### 【作者名】

うどん

### 【あらすじ】

見た目は大学生活を満喫しているように見えるけど本当は人間嫌いというか他者と接するのが苦手で図書館に引きこもっている女子大生がリア充の男子大学生とひょんなことから知り合いになる話。女子大生は心の中ではアクティブな思考をしていますが、それを表に出すと「お前空気読めないな」って言われるのをちゃんと理解している。で表面上は周囲に合わせています。それに対して最近疲れ気味。

彼女の心中心の話なので暗い話もありますが基本的にはギャグのよ

うな話になっています。

## とある大学生の話

『今週の日曜彼氏とデートするんだ』

『わあ素敵！どこに行くのお』

『この前開園した遊園地い。知ってるう？』

『知ってる知ってるう！あそこさあ、この前誰かのPVでも使われたんだよね！いいなあ！』

耳に入るのは実にくだらない内容ばかりである。

貴様ら一体ここに何をしに来ているのだ。自慢話か？

生憎私はここには学問を習得しに来ているのだ。

貴様らのチャラチャラした内容なんぞ耳に入れ頭で理解するために使うエネルギーすらもったいないから早々と席を立たれい。

そんな事を言えるわけもない。

キャンパスにいて耳に入るのは彼氏がどうした彼女がどうした最近の音楽は素敵だこの間の映画感動した…実にくだらない。

キャンパスにいて目に入るのはオシャレ女子の秘訣だの最新のスウィーツだのお勧めのデートスポットだのの雑誌の記事…実にくだら

ない。

いつしか親に言われた事がある。

「あんたって本当につまらない子」

至極その通りだと思った。

趣味もなければ特技もない。やりたい事もなければ欲しい物もない。恋人がいるわけでもなければ結婚願望もない。正直結婚も子供も今の自分には人生の荷物にかなり得ない。

将来の夢は公務員で一人アパートか何かに住めればいいと思っている。

都内に住めば交通が発達しているから車もいらない。免許もいらなければ保険料もかからない。

大学のキャンパスに通っているのにたかだか就活や身分証明の為に30万前後を出して免許をとる友人は正直バカだと思う。

「居酒屋とかでさー免許証とかあった方が楽なんだよ」

って言ってるのをいつしか聞いた事があるが居酒屋などに行かねばいい話である。

「コンビニとかでさータバコ買う時楽なんだよ」

と言ってる奴もいたが煙草？全く持って愚の骨頂。身体に悪影響し

か及ばさない葉っぱの為になぜ金を出さねばならないのだ。私には理解できん。

こんな考えの人間が大学で上手く適応できるかと問われれば普通は「できぬ」と答えるだろう。

しかし人間は嘘がつけるのだ。

「キヤーこれ超可愛いと思わなあい？」

と問われ、本当は「はあ？目ん玉腐ってんじゃねーの」と言いたいところを

「うん超可愛いー」

と言うことも可能なのだ。

全く持って問題なくリア充な大学生活を遅れているように見えてい  
るだろう。

表面上は。

最初は確かにこれで上手くやって行けていた。

「可愛い」

「楽しい」

「面白い」

本当はそう思っていないなくても口に出すことによってなんとなく自分は本当は楽しいのかも…と思っていた。

しかし自分の心を騙すのに最近限界が来たのである。

何を見てもくぐらなく見える。

友人の顔が全員同じに見える。特に女子なんて最悪だ。化粧のせいで見分けなんてつくわけない。

集合写真で自分を探すのだって一苦労だ。

それを隠すためにさらに一生懸命自分を誤魔化し仮面をつける。

自分の顔には一体何枚の仮面があるのだろうか？きつと何重にもなつて素顔なんてきつと埋もれてしまっているに違いない。

自分の素顔などなんだった？どんな風に笑う？どんな風に怒る？どんな風に泣く？

そんなことも感じられないほど鈍くなっていってしまった。

きつと自分が泣いていても、流した涙が仮面に吸収されて誰も自分が泣いていることに気づいてなんてくれないのだろう。

気付いたら自分は人と距離を置くようになっていた。

遊びに誘われても何かと理由をつけて断った。

一緒にご飯を食べようと誘われても用事があると言って断った。

他の人と一緒にいたくなかった。

その人の汚い部分を通して自分が悩んでしまうのが嫌だった。

一人でいたいのに独りでいるのもつらい。

自分の居場所はどこにもないと思った。

助けてくれる人もここから救い出してくれる人もいない。

きつと自分が死んでも「ああ、あの人が死んだの。残念だね」位にかきつと思われないことがとても虚しく思えた。

自分を必要としてくれる人が欲しかった。

だけど自分は誰とも喋りたくなかった。

我が儘な自分。きつと誰も私のことを受け止められる人はいないだろう。

そう思っただけで私は本に逃げた。

紙と文字だけが私を受け止めてくれる。そう思ったのだ。

私はそれから図書館に籠った。

ラノベ、古典、漫画、ミステリー、恋愛……何でも読んだ。

たくさんの本を読んだ。たくさんの本たちが私を受け止めてくれた。それだけだった。

受け止めたけど受け入れては入れなかった。理解してはくれなかった。

いくら読んでも私の心は満たされなかった。晴れなかった。虚しくなるばかりだった。

それでも外の世界に行くよりはずっとマシだと思っていた。

そんなある日、一人の男の人が私の席の隣に座った。

## とある大学生の出会い

隣に座ったのはいかにも最近の大学生ですって感じの男子だった。  
：まあ私も大学生だが。

今流行りの草食系男子ってやつだろうか。

肉食系だとか草食系だとか正直私にはよく分からない。

人間は雑食じゃないのか、ベジタリアンなのかとかいろいろ突っ込みたいところだが今は関係ない話なので置いておこう。

私は隣に人が座っているとパーソナルスペースが侵された気がして落ちつかなくなるのでいつも図書館では空いている階に陣取っている。

それなのに何故この男子はあろうことかこんな空いている席の中で私の真横を選んだのか。全く持って腹立たしい。

それとも何か、私がトイレか何かで席を外した瞬間、財布をパクろうって魂胆か。その手には乗らんぞ。

私はその人から離れようとひとつ隣の席に移ろうとした。

「あおう、すみません」

するとその草食系男子はいきなり私に話しかけてきたのだ。

もしかしてこいつは私の顔見知りだったか？邪険に扱っては残りの

大学生活が苦しくなるかもしれぬ。余り邪険には扱えない。

そう思い、私はいわゆる「愛想笑い」を顔に張り付けにこやかに対応した。

「はい、なにか？」

「いきなりすみません。見ず知らずの人にこんなこと申し訳ないんだけど…」

なんだ、こいつは顔見知りじゃなかったか。最近の若い奴はみんな顔が同じに見えるんだよ。…私も若いけど。

「ペン貸してくれる？ 今日一日」

「は？」

いきなりなんなんだこいつは。

初対面で物貸してくれて、しかもタメ口かよおおお！これがゆとり？ いや私もゆとりだけど！

「今日友達と講義かぶってなくてさ、なのに筆記用具全部忘れてきちゃって。ついでに教科書も」

「はあ。別にいいですけど…」

私は愛想笑いも忘れ、半ば茫然と消しゴムとシャーペンを渡してやった。

何なんだよこいつ。最近の若者怖えええ。私も若者だけど。

「おーさんきゅっ！マジで助かる！教科書借りに図書館来たんだけどさあ、あんた見えたから勇気を振り絞って頼んだ甲斐があったよ」

「私が見えたから？」

何を言ってるんだこいつは。日本語でおk

「だってあんた、いつつもここにいるだろう？俺もよく図書館来るんだけどさ、いつつもあんた見るから」

「はあ」

そんな図書館の座敷わらしみたいに思われていたのか。っていうかいつも見られてたのか！ハズっ！

いつも見られていたということに恐怖心よりもまず羞恥心の方が沸き起こった。

きつと恐怖心を起こさせないのはこいつの雰囲気にあるんだと思う。

「講義終わったらペン返しに来るけど、あんたいつまで学校にいる？」

「別に今日じゃなくてもいいです」

ちょっと冷たかったか…なんて言うってから後悔してもしようがない。

しかし相手は気にした様子もなく「じゃあ今度見かけたときに返す

わ」と笑って再度礼を言いつつ去って行った。

「なんなん……」

ちよつとああいう系統の人間は苦手だ。

自分人生謳歌してます。大学生活楽しいです。苦労何にもしてません。今が楽しければそれでよしって感じのする系統。

出来ればもう会いたくない。

「別の場所に移ろっかな……」

そう思いつつ、私も授業に行くことにした。

## とある大学生の再会

あれから1週間ばかり過ぎただろうか。

あの日以来、私は1個上の階に居座ることにした。

理由は明白、あの爽やか系リア充草食男子に会いたくないからだ。

シャーペンと消しゴムは寄付でもしたと思えば何てことない。別に親の形見でも親友からのプレゼントなわけでもないのだから。

しかしある日、また私の隣に誰かが座った。

パーソナルスペースが侵略されている！

私は急いで隣の席に移動しようとした。

「ちょっと、それマジ傷つくんですけど」

聞いたことある声だな、と思い顔を上げるとそこには爽やか系リア充草食男子の少しむくれた顔があった。

きつと多分、1週間前のあのシャーペンと消しゴムを貸した男子だろう。多分。最近若者は皆似たような顔だからry

私は「あーすみません」と言いつつ、もともと座っていた所に座りなおした。

「なんでいつもの階にいないの？俺結構探したんだけど」

爽やか系リア充草食男子はちょっと非難がましい口調で聞いてきた。

「貴方に会いたくないからです」って言えたらいいのだけどそんなこと言えるはずもない。

「ちょっと気分転換に…」

そう言うのが精いっぱいだった。

「ふーん…」

明らかに納得してない声。そりゃそうだ。これで納得したらただのKYだろう。

「それで、今日はどういったご用件で…」

恐る恐るきく私に爽やか系リア充草食男子は「ああ、そうだ」と言っただけの中から1週間前に貸したシャープペンと消しゴムをとりだした。

「先週はさんきゅー。本当に助かったよ。これ、お礼」

そう言って渡してきたのはブラッ・サンダービッグサイズ。購買で48円で売っている。見かけと値段によらず、意外とうまいので生徒の間では結構な人気がある。

「そんな、お礼なんていいのに…」

戸惑う私に爽やか系リア充草食男子は「いいのいいの」と言って押しつけてきた。

「それじゃあ」と遠慮がちに受け取る私。こんな時の反応ってどうしたらいいのか超困る。

リア充の私の友達とかならきつと「ありがとうございますっキュルン」とか言ってバックに花でも飛ばしながら男心を一発で落すのだろうが生憎人間嫌いの私にそんなスキルがあるはずもない。

おどおどしながら礼を言う私を爽やか系リア充草食男子は珍しそうに見つめている。

私を凝視するのはやめてくれ。いたたまれない。この場から立ち去ってしまいたい。立ち去るための言葉すら言うのがめんどくさい。

しばらく無言が続いた。

リア充は確か無言が嫌いなんじゃないのか？どうでもいいけど早くここから去ってくれ。

そんな願いも虚しく爽やか系リア充草食男子は話し始めた。

「俺さ、政宗っていうんだ。君の名前、なんていうの？」

実にナチュラルなナンパです！流石リア充です！リア充の技、ご披露ありがとうございます！

いや、こんなこと考えてる場合じゃない！私は自己紹介が大嫌いな

のだ。

自分の名前を恥ずかしげに人に伝えるあの空気が耐えられない。

あの「よろしくモジモジ」って感じがどうにもくすぐったいのだ。

しかし相手が名乗ったからにはこちらが言わないのは敵前逃亡になるだろう。時代が時代なら切腹に値する。

しょうがなく私は名乗った。

「…春奈です」

「学部は？何年？」

くっそーそこまできくのか！

「文学部の2年…」

「へー2年か。俺は3年なんだ。学部は経済だけど。ヨロシク」

そういうと爽やか系リア充草食男子…いや政宗先輩は手を差し出してきた。

何なんだ金よこせてことか。

いやいやまさか、流石に握手を求めてきていることくらい分かるが私は握手が自己紹介の次位に苦手なのを知っての狼藉か。

っていうかヨロシクってなんだ。何をヨロシクなんだ。これからも

シャーペン貸すのヨロシクってことか。

私は「あ、はい」と言って手を出した。全く自分が嫌になる。

政宗先輩は握った手をブンブンと数回振った後離した。

ようやくこれで解放される。そう思ったのもつかの間、先輩はこやかに話し始めた。

「俺、次授業ないんだ。もうちょっと話さねえ？」

おいおいいいいい加減にしてくれよおお私のライフは0ですサ  
ーセン！っていうかこっちの都合は無視かい！

「あの…私次授業あつて」

敵前逃亡になるが三十六計逃げるにしかず。

しかしそんな必死の言い訳もあっさりと砕かれた。

「あれ？いつもこの時間図書館で本読んでるよね？授業あつたの？」

なんで知っている…っ！そういえばこの前会った時「たまに見かけるんだ」アハハ」って言ってた気がしないでもない。

「あー…授業じゃありませんでした。でもちよつと今日は用事があったような…」

苦し紛れの言い訳をする私に政宗先輩は少し傷ついたような顔になった。

「そつか…それじゃあしょうがないよね。っていうか知らない野郎にいきなりこんな事言われても困るよね。ゴメンネ」

その様子はさながら置いてきぼりを食らったチワワを彷彿とさせた。

うわああああその目をやめろおおおおお！

自分の貧困なコミュニケーションスキルが発動してしまうだろが！

気が付いたら私は「ちょっとだけなら…」と言っていた。

なんたること。技はすでに起動していたのだ。

自分のバカ

## とある大学生と食堂

図書館で喋ると周囲に迷惑になるから、私と政宗先輩は食堂にやってきた。

食堂なんかに来るのは本当に久しぶりだった。

こんな人がいっぱいいる所なんて私にとったらダンジョン以外の何物でもない。

誰かに会って下らない話を延々と聞かされるかもしれないという苦行を強いられながらご飯を食べるなんて御免被る。

ここは私の居場所ではない。

私のサンクチュアリは図書館である。

昼食時を過ぎた学食は空き授業で暇を持て余した生徒がちらほらいる程度であった。

お菓子や遅めの昼食を食べる者、パソコンをやる者、友達と雑談する者…それぞれ思い思いのことをやっている。

っていうかどこに座ったらいいの。席ありすぎだろ。

久しぶりの食堂に戸惑う私をよそに、政宗先輩は適当に席を見つけ「こっちこっち」と手招きしている。

流石リア充！…いや、これリア充関係ないよね。

私が席に着くと、政宗先輩は荷物を置いて席を立とうとした。

「俺、なんかちょっと腹減ったからなんか買ってくるわー。食べたいのとかある？」

「あ、いえ、お気遣いなく」

そう言うのと同時に私のお腹がグーと鳴った。そういえば今日まだ昼飯食べてないわ…

恥ずかしさのあまり赤面しながら固まると、政宗先輩の先輩が背中を向けた。

もしかして腹の音、聞こえなかったのか？そう思ったが政宗先輩の方はカタカタと震えているのに気付いた。

「先輩、笑うんならちゃんと笑ってください」

そう言った瞬間、政宗先輩は背中を丸めて吹き出した。

ちょ、笑いすぎだろ。

周囲の人たちが「なんだなんだどうした」と言う風にこちらを見ている。

ううー余計な注目は浴びたくないのに…

政宗先輩は、こちらに向き直った。まだ笑っている。目には涙が浮かんでいた。このやろっ、笑いすぎだ。

「っはーおつかしい。面白いね春奈ちゃんって」

春奈ちゃん…だと…ちゃん付けとか小学生以来だぞ…

「先輩、ちゃん付けはないです。春奈でいいですから」

「まじで。じゃあ俺のことは政宗でいいよー」

「それは無理です」

そう断ると、政宗先輩は「えーいいのにー」とぼやいていた。

「っていうかお腹すいてるでしょ。一緒になんか買いに行こうよ。奢るから」

「自分で出します」

「遠慮すんなって！年下は黙って年上に奢られるよー」

「遠慮とかじゃ…」

「っていうか早く行こうぜ、俺腹減って死にそうなんだ、春奈」

なんていう順応性。流石リア充。私にはないスキルだ。自分で「春奈って呼べ」って言うておいて何だか背中がむずむずした。

うーと唸りつつ私は先輩の後を追いかけた。

食堂の入り口付近には券売機とメニューがある。

私の大学の食堂はちょっと巷でもメニューが豊富で美味しいと有名である。らしい。

私は食堂をあんま活用したことが無いのでよく分からない。いつもは購買でカップ麺とかパンとか買って済ませている。

政宗先輩はメニューの前で「うーんどれにするか」と悩んでいる。

「春奈は決まった？」

「うどんで」

うどんは学食で一番安い。ちなみに280円である。味は関西風と関東風から選べると書いてある。正直どっちでもいい。

「えー！うどんかよー。うどんもいいけど奢ってやるって言ってるんだからもっと高いのになよ」

「いや、自分で出しますって」

「誘ったの俺なんだから俺に出させるって！うーん、一番高いのはビーフシチューセットか。よし、これで決定な」

そう言つとスタスタ券売機の方に行ってしまう。

ちなみにビーフシチューセットは680円で学食の中では高級食に当たる。

「ちょ、先輩！ダメですよ！ビーフシチューセットなんて高いのにしたら先輩のお財布が大打撃じゃないですか！」

そう叫びつつ阻止しようとする私を見てまたもや爆笑する政宗先輩。本日二回目の爆笑である。

「超ウケルんだけど、お前！お母さんか！」

政宗先輩はしばらく笑い続けた。私はそれを抗議し続けた。周囲からは注目されていたがもうなんかどうでもよくなっていた。

最終的に今日のお昼はビーフシチューセット（680円）になった。

学食でビーフシチューセット（680円）を食べていると、先輩は通り過ぎる人々に声をかけられまくっていた。

正真正銘のリア充だと思った。

私は数人、同じ学部の子を見かけたが声をかけられることもなかった。

これといって喋ることもないので黙々と食べることに集中していた。

「ねえ、春奈って人が苦手でしょ」

突然そんなことを聞かれた。

吹き出しそうになった。普通そんなこと本人に聞くか？しかも知り合って間もない人間に。

失礼にもほどがある。

「まあ人付き合いは得意ではないです」

息を整え、当たり障りのない返答をした。本音を言ったらドン引きされるのは目に見えている。

「人付き合いもそうだけども、『人』自体が苦手。そんな感じがする」

「……………」

「苦手ってか正直嫌いなんじゃない？」

「……………どうしてそう思っんですか？」

今まで自分が隠してきた気持ちを暴かれた気がした。知り合ってまだ数時間しか経ってないのに。

私の何が分かるの、私の何を知っているの、私の何を理解できるの  
複雑な気持ちが胸に溢れて声が震えそうになった。

でもそれに気付かれたら何だか負けのような気がして震えないように  
に声を出した。

「なんとなくかな。拒否されてるのが分かるんだよ、人って」

「それは…人と目を合わせるのとか苦手だし、人見知りするから…」

「それもあるけど…春奈の場合、身体から出てるんだよね。人を拒絶してるのが」

「……………」

「最初は俺だけかなーって思ってたんだ。ほら、いきなり声かけちやっただろ？警戒してるのになって」

「……………」

「だけどさ、数時間一緒にいて何となくだけど思ったんだ。この子は全ての人に対してそうだって」

気付かれた。今まで表に出したことのない自分の気持ちを、名前と学年くらいしか知らないような人に。

ちゃんと隠してきたつもりだったのに。

この人は私のこと軽蔑するかな。嫌な女だと言っかな。冷たい人って罵るかな。

まあいいか。そんなこと言われたってどうでもいいことだな。心の中で自分に言い聞かせた。

所詮気付いたところで何も変わるまい。

またいつも通り図書館で本を読むだけの毎日が待っているだけだ。

罵られたって知らない人だ。無視すればいい。

しかしいくら待っても罵声どころか非難の言葉すら来なかった。

ビーフシチューに落していた視線を上げると政宗先輩と目が合った。

先輩は微笑んでいた。

私は思わず顔を背けた。

「何があったかは分からないけどつらかったんだろ？」

「そんなことはありません」

「苦しくて辛くて助けてほしいのに誰もそれに気付いてくれなかった」

「やめて下さい」

「君は十分頑張っているよ」

「やめて下さい」

政宗先輩は小さい子供に言い聞かせるように言った。

「泣いているのを隠す必要はないんだ。思いっきり泣いた方がいい」

「私、泣いてなんかいません」

ハイハイと言ってハンカチを差し出す先輩。

気がつくとも目からは洪水でも起きたのかって言うほど涙が流れていた。

なんてこと…私は認めないぞ。

「これは目からビーフシチューが出てるんです!」

「まじでか」

苦し紛れの言い訳に先輩は優しく笑ってくれた。

## とある大学生の暴露

先輩の前で目からビーフシチューを垂れ流してから数日が経った。

あれから何か変わったかというと特に何も変わらない。いつも通り図書館に引きこもって受け入れてはくれない本たちに己をぶつける毎日だ。

ただ週に何回か先輩に図書室で会うことがあった。

特に会話するわけでもなく、先輩は「やあ」と声をかけて隣に座る。ひとつ席をあけて。そして授業が始まる時間になると「それじゃあ」と言っでどちらかが去るのだ。

それだけ。

それだけが私にとって唯一の大学での人との触れ合いになっている気がした。

それからしばらくして、私は図書室以外で先輩に会った。

その時先輩は友達と一緒に歩いていた。

男数人女数人。先輩以外は皆同じ顔に見える。

対する私は一人。

寂しくはないけど何となく気ハズいというか…そう、人数負けして「これじゃあ太刀打ちできない！」って思ったから挨拶もせずに通り過ぎようとした。

しかし期待は裏切られ、通り過ぎた背後から声が聞こえた。

「春奈あ、挨拶」

シカトしてくれればいいのに…先輩のKY

しょうがないから振り返って「こんにちはっ！」って挨拶してやった。とびきりの愛想笑い付き。

「ゴメンナサイっ！ボーっとしてて気がつきませんでしたあ！」

リア充の友達のマネをした口調言った。

数少ない私の対人スキルである。

これなら先輩の友達に怪しまれたり「何あの子、暗あい感じ悪い」とか言われずに済むだろう。

私は非難されたり陰口叩かれたりするのが嫌いだ。

それが自分に対してであろうと他人に対してであろうと関係ない。

負の感情を聞いたり感じたりすること自体が嫌いだ。

要するに私は臆病者なのだ。

先輩の友達は「なにい？後輩？こんにちはあ。超ウケルー」とか言い合っている。

なにがウケルのか。よく分からないがリア充式挨拶はばっちりだったようだ。

しかし当の政宗先輩はむっとした顔をしている。

何か気に障るようなことでもしただろうか。

ところが政宗先輩は突然笑顔になると両手をパンッと合わせた。

「そうだ！俺、春奈と約束してたわ！今日のカラオケキャンセル！マジごめん！」

初耳である。そんな約束などしていない。

リア充友達は「はあ？」と顔をしている。当然だ。私もしている。

「本当にゴメン！この埋め合わせは必ず！」

「マジ最低え！」

「うちらもただお、春奈ちゃんもカワイソー！」

リア充友達の誰かがそう言った。私が可哀想？

「ってかあ、春奈ちゃんも一緒に来ればいいと思う！」

なんだと…

御免被る。長らく図書館という要塞に守られていた私が見ず知らずのひととカラオケなどと…レベルが高すぎる。

他の友達も「それがいいよー!」と言っている。

勘弁してくれ。

「用事があるんで…」そう断ろうと口を開こうとしたところに政宗先輩が割り込んできた。

「はいはい、また今度なあ」

そう言っただけで友達に別れを告げさっさと行ってしまっ

ちよ、おま。

友達も友達で「しょうがねーなー」って笑って歩き出してしまった。それでいいのか。

私は急いで政宗先輩を追いかけた。

すると後ろから「政宗に高い夕飯おごってもらえー」って声が聞こえた。

振り向くと先輩の友達の一人が手を振っていた。スポーツ青年って言葉がぴったりにくる感じで少しマツチヨな男の人だった。

私はどうしたらいいかわからず、とりあえず会釈だけした。

政宗先輩に追いついてみるとムスっとした顔がそこにはあった。

なにが気に食わないのかよく分からない。

「先輩なに起こってるんですか？」

「別に」

めめめめめんどくせええええええ！別にとか超怒ってるじゃん。

「っていつか今日約束してましたっけ？」

「してた」

「これからどこ行くんですか？」

「スタバ」

「スタバに何しに行くんですか？」

「別に」

「……………」

疲れる。

先輩はなにをしたいのか。そもそも会話する気ないじゃないか。こっちは珍しく一生懸命話しかけているのに。

帰りたいなあなんて思っていたら突然先輩が立ち止った。

後ろについて歩いていた私は先輩の背中に激突する。

「すいませ…」

「さつき春奈さ、無理してたでしょ」

「は？」

「なんか最初話した時と同じような感じがした」

不機嫌の理由はそれなのかよおおお下らねええええ！

そりゃ、政宗先輩と最初話した時も超愛想笑い全開だったけどさあ！

「また警戒されたのかと思った」

警戒していたのは貴方のお友達に対してですよ。

とは言わない。

言っただって先輩の気を悪くさせるだけだ。

「だからちよつと話したくなっただ。急にゴメンな。ちよつと無理やりすぎたわ」

全くだ。そんな下らない理由の為に私は気を使って時間を無駄にしようとしていたのか。

腹立たしい。

しかし不満は伝えない。

「私も悪かったです。以後気をつけます。それより先輩、カラオケに戻った方がいいですよ」

自分で言っておいてなんだが、これから何に気をつけるのか。

笑わせる。

その場しのぎの身も何もあつたものではない言葉。

自分もこれに納得する他人もバカみたいだといつも思ってきた。

しかしこれでこの状態から逃げ出せる。そう思った。

そこでようやくこれまぜずと背中を向けていた先輩がこちらを向いた。

先ほどまでの不機嫌な表情はなかったがかと言って納得したような表情もなかった。

「春奈はさ、自分の言葉が少なすぎるんだ」

「自分の言葉？」

先輩はなにを言っているのだろうか。

「自分の気持ちをちゃんと人に伝えたことはある？伝えようと努力はしている？」

「はぁ」

「ちゃんと自分の気持ちを言葉にしくちゃ相手には分からないよ」

「……………」

「たとえそれを強く思っていて態度で伝えていると思っても言葉にしくちゃそれは伝えたことにならない」

「……………」

「俺は春奈から謝罪の言葉を聞きたいわけじゃない。春奈の気持ちが知りたかったんだ」

イライラしてきた。

今までの自分のあり方を否定されている気がした。

これで上手くやってきたのに。

自分の気持ち？自分の気持ちなど他人に理解してもらおうなんて思ったことなどない。

私は人間が嫌いなのだ。

その気持ちに気付かせたの政宗先輩じゃないか。

「自分の気持など伝えてどうするんですか？」

気がつくと言が出ていた。

「嬉しい？楽しい？面白い？自分はそんな感情滅多に感じないんですよ。怒り、ムカつき、焦り。いつも感じてるのは負の感情ばかりです。それを他人に伝えたらどうなります？あいつは暗い奴だとか空気が読めないとか言われるんですよ。伝えたって無駄です。大学生活も気まづくなります。そんなだったら最初から何も言わない方がいい」

今まで押し殺していた気持が止めどなく出てきそうだった。

怖いという気持ちが喋りだす自分を抑えようとしていたが無理だった。堰を切ったかのように言葉が出てくる。

「今が楽しくて面白くて充実していればそれでいい、悩みなど後になって考えればなんとかなるなんていう傾向のある周囲に私は付いていけません。私は今悩んで苦しんで問題に直面して耐えられないと思ってるんです。それをお気楽な天気な周りに相談したり気持ちを伝えてもその人たちは私を受け止められますか？受け止められるわけありません。口では「大変だね」とか「頑張つて」とか言いますが本心では「なんでそんなこと私に相談するの」って思う人ばかりです。そんなの…余計自分が惨めになるだけ」

ここまで人に喋ったことなどあるだろうか。

きつと政宗先輩は私のこと軽蔑するに違いない。

ここまで私のこと理解してくれた人なんて初めてだったけど所詮は

他人のなのだ。嫌われたら捨ててしまえばいい。今ならまだそれが出来る。

「そっか…」

今まで黙って聞いていた先輩が口を開いた。

私は先輩の目を見れない。

「今まで自分の苦しみを人に理解してもらえなかったんだね。それは辛かっただろう」

「先輩だって私のこと軽蔑してるくせにそんなこと…言わなくていいです」

「軽蔑なんてしてないよ」

嘘だ。

今までみんなみんなそうだった。

「応援してる」とか「私は理解してる」とか言っというて本当は理解なんてしてくれていなかった。

私が期待して目を合わせると気まずそうにそらされてきた。

裏切られるのはもうたくさんだ。

「ほら」

声が近くからしたのでつい顔をあげてしまった。

すると正面には政宗先輩の顔があった。

私より15cm近くは背が高いであろう先輩は、腰を屈めて顔の位置を私に合わせている。

「これが嘘をついている人の目に見えるかい？」

不覚にも目を合わせてしまった。

ようやく自分と目を合わせてくれる人が現れた。

私はこの人を信用しても大丈夫なのか？

この人も私を裏切るんじゃないか？

まだ分からない。

色々複雑な気分であった。

だけど先輩の目は嘘をついているようには見えなかった。

こんなことを思う自分を酷く滑稽だと思った。

「ハズカシイ人」

思わず出た言葉に政宗先輩は「このやろっ」と言って頭を小突いてきた。

本当に、私も先輩も、ハズカシイ人間である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3276p/>

---

とある大学生の悩み

2010年12月14日17時29分発行